第70回熊本県酪連通常総会開く

隈部　洋　会長

森　浩一郎　副会長

熊本県酪農業協同組合連合会の第70回通常総会が６月26日（月）、本会会議室において開催されました。

総会は、隈部洋会長の挨拶、国・県・関係団体の来賓祝辞に続き、苓北町農業協同組合の濵石和男組合長を議長に選任し、令和４年度事業報告、貸借対照表、損益計算書、注記表、附属明細書および剰余金処分案承認の件、令和５年度事業計画承認の件など６議案が上程され、いずれも原案通り承認されました。

三角修副会長の退任に伴う役員補欠選任が実施され、菊池地域農業協同組合の森正晴副組合長が理事に選任されました。

森　正晴　新理事

また、総会後に開催した理事会にて、新たに森浩一郎副会長（菊池地域農業協同組合）の就任が決定致しました。

【令和４年度事業概況】

令和４年度の我が国経済は、ウクライナ情勢の長期化など海外情勢を背景に、世界的なエネルギー・食料価格の高騰をはじめ、為替相場の変動から急激な円安に陥るなど不安定な状況が続きました。一方、新型コロナウイルス感染拡大における共存への動きが拡がり、コロナ禍からの緩やかな持ち直しが見られました。

酪農界においては、飼料をはじめ生産資材、燃料価格の高騰に加え、生乳需給ギャップ、副産物価格の暴落など、酪農経営は「かつてない危機」に直面しました。異例となる乳価の期中改定や各種支援策も講じられましたが、生産抑制の実施や廃業の増加など生産基盤の毀損も懸念される状況が続きました。

乳業界においては、需給緩和が続き、脱脂粉乳の在庫が過去最高を更新するなど不安が拡がりました。また、原材料価格やエネルギーコストの高騰が続くなかで、乳価改定に合わせた値上げが実施され、消費動向に懸念が及びました。今後、業界挙げての更なる消費拡大に対する取り組み強化が課題となっています。

このような状況のもと、生産本部においては、急激に悪化する酪農経営環境を受け、経営継続緊急支援対策をはじめ、配合飼料や自給飼料確保など生産コスト維持に向けた各種経済支援対策を実施しました。また、優良な搾乳後継牛確保と育成牛増産支援ならびに繁殖成績の改善に向けた検診事業の充実に取り組みました。さらに肉資源確保に向けた枝肉仕入れの強化と肉製品の拡売に取り組みました。

乳業本部においては、新規の量販店向けＰＢ牛乳や業務用ＬＬ加工乳を発売し、販路拡大に努めるとともに、乳価改定に伴う納入価格の改定を実施しました。また、工場の安全性向上を図るため熊本工場の脱脂濃縮乳タンク増設やクレート洗浄機、菊池工場の自動倉庫設備等を更新したほか、検査機器の更新・点検による品質保証体制の強化に取り組みました。

管理部門においては、役員体制の一部変更に伴う効果的な業務運営の推進と、体系的な教育・研

修の実施に努めました。また、収益の安定確保と自己資本の拡充を図るとともに、熊本工場冷蔵庫増設に向けた敷地開発工事や、新たな支援チームを設置するなど組織整備の推進支援に努めました。

特別会計（阿蘇ミルク牧場）においては、酪農・乳業の理解醸成施設としての機能強化を図るため、イベント等の充実に努めるとともに、売上拡大を目指した外部販売の強化に取り組みました。また、老朽化した施設の改修や更新など、衛生・環境面を考慮した施設整備を実施しました。

【令和５年度事業方針】

わが国経済は、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化や為替変動など海外情勢の影響を受け、エネルギー価格や原材料価格の高騰により諸物価の上昇が続いています。

一方、新型コロナウイルス感染症対策と両立する社会・経済活動が進み、観光や外食需要の回復が伺えるものの、物価高騰による経済活動の減速も危惧されています。

酪農界においては、飼料をはじめ資材価格の高騰や副産物価格の下落等により、酪農経営は過去に例のない厳しい状況に直面しています。前年度期中には飲用向け乳価、今年度からは加工向け乳価の値上げが実現されましたが、未だ危機感は高まっており、生産基盤の維持を含め、予断を許さない状況が続いています。

乳業界においては、脱脂粉乳在庫は対策等により減少傾向で推移していますが、乳価引き上げに伴う製品価格改定の影響が懸念され、需給ギャップは依然として厳しい状況が予測されます。また、インバウンドの回復等で業務用需要は堅調に推移していますが、家庭内需要は低調に推移しており、更なる消費拡大の取り組みが求められています。

このような状況のもと、本会では、現状の厳しい酪農情勢への対応を最優先に、将来に向けた強固な組織づくりに邁進していくため、以下の事業に取り組みます。

生産本部においては、県内産飼料と搾乳後継牛の安定確保や飼養管理技術指導など酪農経営支援体制の充実による生乳生産基盤の維持・強化を図ります。また、指導・購買の推進による事業拡大と酪農経営の持続力向上に取り組みます。さらに、肉資源確保に向けた集畜の推進と肉製品の販路拡大や有利販売に努めます。

乳業本部においては、生産者直結の乳業メーカーとしての強みをさらに活かし、新規開拓と積極的な営業展開による事業拡大を目指します。また、引き続き安全・安心な製品づくりのため食品安全システムの強化を図ります。さらに、市場環境と消費者ニーズの的確な把握に努め、付加価値の高い製品開発に取り組みます。

管理部門においては、職員教育および人事制度の構築、ならびに財務体質の強化に取り組むとともに、法制度等改正に伴う対応や情報通信技術を活用したデジタル化を推進します。さらに、組織整備・設備投資など業務全般にわたる企画立案や進捗管理に努めます。

特別会計（阿蘇ミルク牧場）においては、酪農・乳業の理解醸成施設として、イベントの取り組みなど充実を図り、来場者の満足度向上に取り組みます。また、乳牛舎の運営管理やチーズ製品等外部販売の強化に努めます。

議長：濵石　和男　組合長

第２回酪農後継者育成塾が開催されました

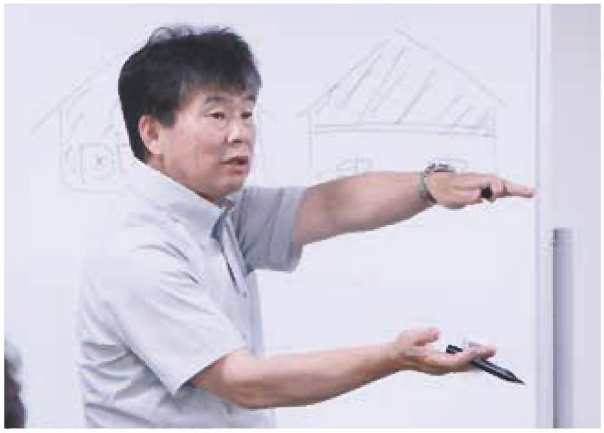
生産本部　営農指導課

去る６月30日（金）に令和５年度第２回酪農後継者育成塾が開催され、24名が受講しました。

らくのうマザーズ生産本部南部本部長の挨拶では、夏場の対策の前提として経営の最大のマイナスである牛の死亡廃用を防ぐこと、特に理由もわからず死亡するようなことがないように、講義の内容を持ち帰ってほしい、とのお言葉がありました。

南部本部長

今回の育成塾は全酪連の技術顧問、永井秀樹先生により、「暑熱対策で乳生産をキープする」、「サシバエの習性とその防除対策」と題し、今日からできる対策や、現場で検証された実例などを詳しくお話していただきました。



全酪連　永井　秀樹　先生

①　暑熱対策について

まず、暑熱対策を始める目安として、THI（湿度温度指数）が65～68で高泌乳牛がヒートストレスを感じ始めることを考えると、気温が20度になった時点が何かしらのアクションを起こすタイミングであるということです。熊本でいえば、牛の「夏バテ」問題はすでに春から始まっているので、影響が長期的になることが注意点です。

ヒートストレスを受けた牛は代謝や採食行動により全身的かつルーメン内のｐHが変動し、生産性の低下に加え、蹄や乳房、子宮の様々な疾病につながります。特に暑熱期は「固め食い」「選び食い」が発生しやすく、それらを助長し負のスパイラルに陥ります。まず、できる対策としては給餌回数と給餌間隔です。給餌方法がTMRであれば、位置に気を付けながらの掃き寄せ回数の増加、細断長・加水のチェック、分離給与であれば給与回数の増加、粗飼料の細断が効果的な対策です。共通して飼槽の改善や、掃除も必須条件です。

施設面の対策として①外からの熱の進入を防ぐ②牛の熱放散を助ける③牛を冷やす④牛に「水」を補給するなどについて、詳しくご講義いただきました。特に牛に風を当てることが重要であり、常時２m/秒以上（理想は３m/秒以上）の風を牛体に当てることによって、送風と換気の役割を果たされます。

〈永井氏の施設対策のまとめ〉

① 余分な熱を牛舎内に入れないこと
② 暑熱対策の基本は送風と換気
③ 細霧冷房、牛体散水は“乾かす”ことが条件
④ 新鮮な「空気」と「水」を与え、飼料給与に一工夫を
⑤ 牛舎の構造によって方法と組み合わせは異なる
⑥ 費用対効果の判定が必要

講義の様子

② サシバエ対策について

午後は、班でのグループワークを実施し、「自身の牧場で行っているサシバエ対策」について活発な意見が交わされ、薬剤散布、搾乳時の乳房に風を当てる、雑草対策を実施する、などの意見が出ました。

永井先生の講義では、サシバエの生態について、活動が盛んな季節としては春から初夏、晩夏から晩秋、夏は朝夕（搾乳時間帯）春・秋は昼間（休息時間帯）で、温度域があることから、熊本県では４月～11月が活動期間といえますが、真夏は温度域を超えるため、活動が弱まるといえます。

グループワークの様子

牛舎の周辺に草むらや田んぼなどサシバエが休息する場所の面に防虫ネットを張る方法により、牛が一定の場所に片寄る現象を減らすことができたそうです。また、吸血で満腹になったサシバエは高く飛ぶことができず、高さ２mのネットで動けなくなるので、そこに殺虫剤を散布すると簡単に駆除できます。ネット設置のポイントはしっかり下部まで張ること、目のサイズは２㎜が適正です。

基本的には「発生源を減らすこと」が一番重要です。サシバエは平均二十日で羽化するため、一週間以内の間隔で除糞清掃することは発生を減らし、薬剤散布するより低コストで省力といえます。

〈永井氏のサシバエ対策のポイント〉

・サシバエ生息数を減らす対策
① 発生源の除去（糞や食べ残し飼料の除去）
② ネットとの組み合わせ：殺虫剤（忌避剤）の併用など
・一定の風速（2～3m/s以上）が常時あると、サシバエが飛行して牛に近づけない

最後に、永井先生より一番の正念場は９月であり、夏場の乾乳牛の暑熱対策ができているかどうかがポイントとなる。９月以降の乳量生産ないし繁殖成績に大きく反映されるので、しっかりと搾乳牛だけでなく乾乳牛も対策を行う様、お話がありました。

受講後のアンケートでは、「暑熱対策に関して、屋根への塗布や、牛体を濡らして風を当てるなど、牛にとって最適な装置を取り入れたい」「餌の給与方法を工夫して、食べさせるよう努力したい」「サシバエに関してとても勉強になった」「ほかの農家のやり方、情報交換ができてよかった」などの感想がありました。

令和５年度も後継者の育成や交流を目的とした酪農後継者育成塾を全５回で開催予定です。興味のある方やお問い合わせ等ございましたら担当までご連絡下さい。

（営農指導課　担当：久田　096－388－3510）

COLUMN ―コラム―

「チーム乳業本部」頑張ってます！ Part 2

らくのうマザーズ
乳業本部長　**櫨本 清和** 氏

昨年11月号以来８ヶ月ぶりの寄稿となります、乳業本部の櫨本です。前回も乳価改定時に合わせて書かせていただきましたが、今回も乳価改定を間近に控え、「チーム乳業本部」として臨んだ前回の販売価格値上げに努力した結果と、８月の乳価改定に向けた現在の値上げ交渉状況について、「チーム乳業本部」一丸となり頑張っていることを書かせていただきます。

令和４年度の乳業本部実績については、11月以降の小売価格改定による販売数量減少を心配しておりましたが、減少を最小限に抑えることができたことで、売上高は史上初めて200億円を突破しました。また、処理乳量も94千ｔを上回り、その殆どは飲用向けということで乳価アップに貢献できたと自負しております。このことはやはり「チーム乳業本部」として三位一体となり努力したことが要因と考えています。営業部では新製品発売や取引先毎に収益・数量確保をバランス良く考慮した交渉などを頑張りました。交渉を優位に進めるためには、安全・安心な製品を必要な時間に必要量製造する事が重要であり、両工場ともHACCPシステムに基づき検査・点検を繰り返し行っております。品質保証部においてはお客様相談の最初の窓口として、信頼性のある対応や報告書作成に務めており、その後の営業マンの対応へと繋がっていると思っています。また、色々な面でご支援・ご協力いただいた皆様には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。お世話になりました。

令和５年度第１四半期についても、４年度後半の状況を維持して進んでおり、計画・前年とも上回って進捗しています。しかしながら、チルド製品のメイン品目である「らくのう牛乳」については厳しい状況が続いています。８月以降さらに厳しい状況が予想されますが、それぞれの持ち場で今まで以上の努力を行い「チーム乳業本部」としてより一層団結力を高め頑張っていきたいと思います。「チーム○○○」といえば、記憶に新しい３月に行われた野球の世界大会WBCでの「チーム侍JAPAN」です。素晴らしい一体感を感じました。ベテラン選手が合宿初日から参加し、自分の調整もほどほどに若手選手の指導を行い、技術面に限らず生活面を含めて相談役ともなっていました。初めて会う日系メジャーリーガーとも合流初日から日本名のTシャツを着用するなど、チーム全員歓迎ムードで盛り上げていましたし、試合前の声出しやパフォーマンスでもその選手が中心に置かれていた印象です。また、怪我をした選手がいれば代わりの選手が責任もって仕事をし、怪我をした選手は復帰への努力を怠らず最終的には復帰を果たしました。束ねる指揮官は選手を全面的に信頼し、短期決戦ということで調子の良し悪しに限らず計画的に投手を起用し、調子の悪い選手がいてもその選手の資質や精神面も見極め、継続的に使い続け最終的には勝利に貢献することができました。一人の天才的な選手を中心に、選手・スタッフ全員が一致団結した結果“優勝”という最終目標にたどり着いたのだと思います。「チーム乳業本部」の最終目標は“事業計画の必達”です。さすがに天才的な突出した人間はいませんが、平均的な職員が一つ上を目指して努力して行きたいと思います。営業部では既存製品のブラッシュアップと新製品を投入し、両工場ではHACCPシステムを更に充実させ、互いに不足するところを補い「チーム乳業本部」職員全員で信頼しあいながら、今後の最終的な値上げ交渉と８月以降の販売量の変化に対応していきたいと思います。最後になりましたが、今後も読者の皆様方には牛乳消費拡大にご協力をお願いしなければなりません。依然全国的に厳しい状況が続きますが、ともに頑張っていきましょう。よろしくお願いします。

子牛のでべそ

生産本部指導部技術課　　塩手　文也

子牛が生まれて数週間後にでべそが気になることがありませんか。主な原因としては、臍帯炎や臍ヘルニアもしくはこれらの合併症があげられます。出生時における臍部の感染や不適切な予防処置が原因となることがあり、治療が遅れると化膿症に移行して予後不良になる例も少なくありません。そこでまずは、臍帯の構造について話をしていきます。

◎臍帯の構造

臍帯は、母牛と胎児をつなげている管で、大きく分けて肝臓に繋がる臍静脈、大きな動脈に繋がる臍動脈、膀胱に繋がる尿膜管の３つから構成されています（図）。子牛が生まれて臍帯が断裂され、へその緒が退縮し、最終的にヘルニア輪が閉鎖することで外部からの感染を防ぎます。臍帯の感染は、臍帯が乾燥するまでの約一週間以内に起こることが多く、感染が進行すると、尿膜管は膀胱、臍静脈は肝臓に繋がってるので、臍帯炎から膀胱炎、肝膿瘍等に進行することもあります。このような事態を防ぐためには早期発見、早期治療が大切なので、次にでべそで確認する項目とよくある疾患である臍帯炎と臍ヘルニアについて話したいと思います。

臨床獣医より引用

◎でべそで確認する項目

・ヘルニア輪の有無

臍帯が通る穴をヘルニア輪と呼びます。このヘルニア輪の有無や大きさを調べてみてください。これにより対処や治療が変わり、場合によっては手術が必要な可能性があります。

（図）　　臨床獣医より引用

・でべその中身

でべそを直接触ってみて、柔らかいのか固いのか、中に押し戻せるか、痛がるかどうかを見ます。痛がる場合は炎症が起きている場合があります。中身によって無症状、腹痛、下痢など様々な症状を起こします。柔らかく、でべその中身が戻せる場合は臍ヘルニア、中身が固く、膿や痛み、中身が押し戻せない場合は臍帯炎の可能性があります。

・子牛の状態

体温、食欲、尿などをチェックしてください。これによって感染の有無や全身に及んでいるかどうかを判断します。発熱がある、食欲低下、尿の色が混濁、血尿などの場合は、膀胱炎になっている可能性があります。

◎臍帯炎

臍帯炎は、出生直後でまだ皮膚に覆われていない臍帯が汚染されて感染してしまうと臍帯炎になります。臍部のみの感染や、肝臓や膀胱まで感染してしまうこともあり、最悪の場合死に至ることも有ります（図）。特徴としてはヘルニア輪がある場合も無い場合もあり、でべその中身を触わると痛がることが多く、熱感や膿などが見られます。治療としては抗生剤や消炎剤の投与になります。腹腔内に膿瘍がある場合は手術を行う場合があります。

予防としては、生まれてすぐに臍帯の消毒を行う、臍帯に抗生剤入りの軟膏を注入するなどがあり、子牛の臍帯炎は、これらの予防処置でほとんど防ぐことができます。

６月から９月の気温が高い時期は発生が多いという報告もあり、細菌が増殖しやすいこの時期は特に飼育環境を清潔に保ち、しっかりと臍部を乾燥させましょう。

◎臍ヘルニア

臍ヘルニアは、ヘルニア輪から腹腔内の臓器が出てしまい、でべそに見えてしまいます。先天的に起こる場合もありますが、臍帯炎や下痢などの炎症によってヘルニア輪が広がり、そのまま臍ヘルニアになる場合があります。ヘルニア輪に腸管などが挟まる、ヘルニアが破けて腸管が体外に出てしまうなど、命にかかわる危険もあります。ヘルニア輪が５㎝未満（指３本未満）なら、テープやヘルニアネットでの固定で整復可能です。しかし、５㎝以上（指３本以上）の場合や、内容物が癒着している場合は手術が必要になります。

・まとめ

臍の状態は気がつかないことが多いですが、そのままにしておくと、発育不良、販売価格の低下につながります。生後の処置次第で大きく発生率が変わるので、しっかりとした消毒、早目に臍のチェックを行いましょう。気になるときは、すぐに係りつけの獣医師に相談しましょう。

阿蘇ミルク牧場での酪農醸成活動を開催！

主催：熊本県酪農青壮年部協議会、熊本県酪農女性部協議会、らくのうマザーズ
協賛：熊本県酪農政治連盟

6月25日（日）、一般生活者を対象に牛乳や酪農への理解を深めて頂き、食や命の大切さを伝えることを目的として、阿蘇ミルク牧場にて理解醸成活動を行いました。あいにくの雨となりましたが、参加者の方とゆっくり交流が出来る機会となりました。

バターづくり体験では、63名の方が参加され、家族やカップルで楽しんで作っている姿が見受けられました。その他に、メッセージカードづくりでは子供のみならず、友達、夫婦で日頃伝えられないことをカードにしたため楽しまれたり、乳搾り体験では、参加者への牛乳配布があり喜ばれていました。また、生産者による「牛のカラダ」や「牛の一生」などの説明には参加者の方から酪農や牛乳についての熱心な質問や、酪農に関するクイズ大会が開催され、子供から大人まで大いに盛り上がった活動となりました。

青壮年部女性部の活動として今回の阿蘇ミルク牧場での理解醸成活動は、はじめての取組となりました。大阪から参加されたお客様の「楽しかったです！」というお声掛け等、温かいメッセージをいただき、今後もさらなる酪農醸成活動に繋げていきたいと思います！